



愛媛県指定有形文化財「萬翠莊」は、大正11年に建てられたもので、松山の中心部、城山の裾野にあるフランス風の美しい洋館である。

愛媛県美術館の分館となっていたが、このほど二階部分が俳句の殿堂ともいふべき展示室となって、八木健がそのプロデュースをすることになった。

連句や名句百選、芭蕉、一茶、蕪村、子規、虚子の自筆の句碑の拓本や全国の主宰の色紙と結社誌などを展示することとした。

展示のひとつに「滑稽の系譜」がある。そこには下記の句をならべた。

■ 山崎宗鑑(1465--1553 俳諧の時代)
月に柄をさしたらばよき団扇かな

■ 荒木田守武(1473--1549 俳諧の時代)
青柳の眉かく岸の額かな

■ 松永貞徳(1571--1654 江戸初期の俳壇)
花よりも団子やありて帰る雁

■ 西山宗因(1605--1682 談林の新し味)
ながむとて花にもいたし頸の骨

■ 松尾芭蕉(1644--1694 俳諧の最高峰)
あら何ともなやきのふは過ぎてふくと汁

■ 与謝蕪村(1726--1784 中興の祖)
春の海ひねもすのたりのたりかな

■ 小林一茶(1763--1828 異色の俳人)
やれ打つな蠅は手をすり足をする

■ 正岡子規(1867--1902)
まちがへてほめし隣の柳哉
花嫁の声とも聞かじ猫の恋
牽丸をのせて重たき団扇哉

■ 夏目漱石(1867--1916)
叩かれて昼の蚊を吐く木魚哉

永き日やあくびうつして分かれ行く

■ 高浜虚子(1874--1959)

客去れば庭に現れ草刈女

乳いぢる癖の女や懐手

老僧の骨刺しに来る藪蚊かな

■ 藤田湘子(1926--2005)

両眼の開いて終りし昼寝かな

■ 川崎展宏(1927--)

かたくりは耳のうしろを見せる花

萬翠莊を訪れた方々の反応が楽しみである。

多くの方が「俳句の本質は滑稽」であることに納得されるであろう。